

雷別地区自然再生事業について

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

平成12年の気象害を受ける直前のトドマツ林齡は？
また、樹木や地盤は良好で安定した状態であったのか。

トドマツの林齡は70年生以上であり、地盤等に問題は無く、気象害以前は安定した状態であった。トドマツが枯れたのは、気象害により通水組織が破壊される現象が起き、木が弱ったためであった。

林野庁が雷別地区で自然再生事業を始める前に、トドマツの年輪の状況を確認した。枯れた要因は、水を吸い上げられない状態になっている事であると考えた。この地域は、ナラ等の広葉樹を中心の林であり、針葉樹のトドマツは50年生を過ぎると道東地域では枯れ出す傾向がある。トドマツを植栽するとしても、早めの伐採が適している事を確認した。

他の委員からも意見があったが、ハンノキも含めて戻ってきているならば、エロージョンについての過大な心配はせず、様子をみても良いのではないか。

前々年の森林再生小委員会で、エロージョン対策を施し、早く森林に戻すよう指摘があった。緊急にエロージョン対策を実施すべきということであれば治山的工法を取り入れながら行う必要があると考えている。

現場を見ると、ある程度の面積に浸食を受けても下に流れる事はない。防止工を取り入れる必要はない。

出来るだけ早く自然にササが回復し、エロージョンが自然力によって解消される方向で進めていきたいと考える。

現地を見ることで、皆現状を理解できる。これからは、現地も見ることが一つのテーマだと思う。

その他

釧路湿原自然再生全体構想の見直し、経過報告について

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

資料46ページ、雷別地区の森林再生小委員会の検討について
は、本日の議論を踏まえると、若干検討の必要があると考えている。
記述については再度検討したい。

「地がき」が全て駄目であるという印象になりえるので、但し書きを加え、「凍結土層が出来てしまうような地域では…」等、誤解が生じないようにするべきである。

釧路湿原国立公園達古武地区におけるエゾシカ対策について

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

去年、環境省でエゾシカの捕獲施設を作り、エゾシカが他の天然林地区に移動している可能性がある。他の地域に影響を与えていける可能性があるが、周辺地域についての調査は実施しているか。

事業地外では調査していないため確かなことは言えないが、事業地内での自動撮影カメラでの調査では、捕獲前と比較して捕獲後にエゾシカが減少した事は確認できず、むしろ確認頭数は増えた。捕獲の影響でシカが外に移動したということはないと思う。

第14回 森林再生小委員会 [出席者名簿 (敬称略、五十音順)]

個人[5名]

神田 房行 河野 通船 清水 信彦 杉澤 拓男 中村 太士

関係行政機関[6機関／6名]

国土交通省 北海道開発局 釧路開発建設部 [治水専門官 大田 義博]
環境省 釧路自然環境事務所 [所長 西山 理行]
林野庁 北海道森林管理局 [森林整備部長 坂田 幹人]
釧路市 [湿地保全主幹 菊地 義勝]
釧路町 [産業経済課 農林係長 米山 聰]
標茶町 [農林課林政係 國廣 能央]

団体[9団体／8名]

特定非営利活動法人 EnVision環境保全事務所 [渡會 敏明]
王子ホールディングス株式会社 [王子木材緑化㈱ 帯広営業所 三浦 務]
釧路国際ウェットランドセンター [事務局長 菊地 義勝]
釧路自然保護協会 [会長 神田 房行]
釧路湿原国立公園連絡協議会 [事務局長 菊地 義勝]
釧路武佐の森の会 [会長 大西 英一]
さっぽろ自然調査館 [代表 渡辺 修]
標茶西地区農地・水保全隊 [隊長 佐久間 三男]
公益財団法人 北海道環境財団 [安田 智子]

資料の公開方法

委員会で使用した資料および議事要旨は、釧路湿原自然再生協議会ホームページにて公開しています。

http://www.ks.hkd.mlit.go.jp/kasen/kushiro_wetland/index.html

ご意見募集

釧路湿原自然再生協議会運営事務局では皆様のご意見を募集しています。
電話・FAXにて事務局まで御連絡下さい。

釧路湿原 自然再生協議会

TEL (0154) 23-1353
FAX (0154) 24-6839

釧路湿原 自然再生協議会

森林再生小委員会 ニュースレター

編集・発行：釧路湿原自然再生協議会 運営事務局

No.14

発行日：平成27年1月9日



達古武地域自然再生事業地

2014年11月20日(木)
「第14回 森林再生小委員会」が
釧路地方合同庁舎5階 第1会議室
で開催されました。

■開催概要

「第14回森林再生小委員会」が平成26年11月20日(木)に、釧路地方合同庁舎5階 第1会議室で開催されました。小委員会には、18名(個人5名、9団体、関係行政機関6機関)が出席しました。今回は、雷別地区と達古武地域の自然再生事業の実施状況について説明が行われ、その後、両地区事業について総括的な意見交換が行われました。

再生事業地視察：雷別地区

釧路湿原森林ふれあい推進センターの案内により、笹地12を視察した。笹地12とは、シラルトロ湖に注ぐシラルトロエトロ川最上流部に位置する雷別地区国有林のうち、特に293林班において、平成12年にトドマツ林が気象被害を受け大量の枯損木が発生し、ササ地となった箇所である。

①現地 植栽箇所

- ボランティアによりマルチキャビティコンテナの苗木を植栽。
- 樹高が20cm以上に成長したものを密度2500本/haで植栽。
- 大きく成長した後には他に移し替える。
- 試行としてケヤマハンノキの山引き苗を一部植えた。

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

樹高1m以上のものを植え、風で根が動かないようにしてササを刈ると良い。

意見を参考の上、経過を観察したい。

②現地 C40 急傾斜地でのエロージョン

- 今頃は、草本類が枯れているが、夏には沢山の草本類が入り、去年より良好。
- ササは予測ほど侵入していない。

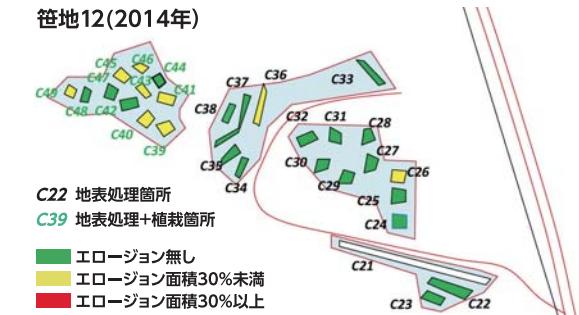
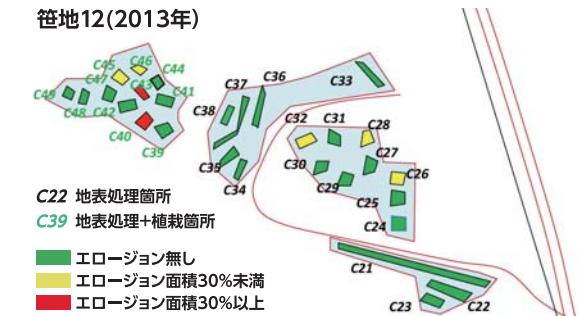
このようなことが話し合われました。

ササを活かす為には刈る方法が良く、ササの丈を適度に保てば、小さい木も育っていく。

農家が、草地改良しようとする場所に生えている樹木を貰って植えるのが一番早いのではないか。

去年はエロージョンが激しい状態であったが、ササやケヤマハンノキ、キイチゴの類なども入ってきて徐々に良くなっている。

林道の脇にある強い樹種のケヤマハンノキ類を山引きし、植えて状況を観察しているが、結果は出でない。



※C21は植栽により地表がかく乱されたため、調査箇所から除外している

委員長 委員 事務局

ハルニレ等も春先に土が凍っているところを取り、そのまま持ってきて植えると根を傷めず、砂利のところでも根付く。

ハルニレやミズナラなどは植えてきたが活着が悪いので、自然の遷移を考えて先駆性樹種から入れた方が無理なく山になると考える。

③現地 C43 エロージョンが激しい箇所

- ・エゾシカとエロージョンの被害が原因で植栽木が枯損。
- ・防鹿柵は8月に完工。
- ・土壤凍結との関わり合いがあると考え状況を観察。
- ・ヤチダモ等の母樹もあるが、母樹由来の稚樹はほとんどなく、生えてくるのは母樹にはない先駆性で風散布型のダケカンバやケヤマハンノキ、ヤナギ等。

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

この箇所は搔き起こし過ぎてしまったが、ササの中に地ごしらえで多目的に植えていく事で良いのではないか。
ここは作業道のために削ったのか。

苗を植えた後にササの影響を受けて枯れる懸念があり、バックホウでササの根茎まで掘り取った。

全体の会議の際に、ササを根茎から掘り取ると土砂が流れることになり、逆効果であると発言してきた。

ササを掘り取った後に木柵工を行うのは過剰投資である。
こういった侵食を起こさない程度の面積でササを刈り取って植えていくのが良い。

既に掘り起こしをした箇所の例を踏まえて、笹地9より北の方では、ササの地表部だけ刈り植栽した後、丹念にササを刈り払っていく方法を行う。また、全面的にササを刈るのではなく、坪刈りや筋刈りなどの省力的な方法で行う。

3mぐらいの若木が生えるとササは陽が当たらない為、自然に枯れる。エロージョンの影響はそれほど無く、短期間で考えずに予算がないのであれば時期を待つと良い。

昨日の委員会で、早急にエロージョン対策を行うべきと意見があった。しかし、植生の回復とともにケヤマハンノキ等が入り込んでおり、先駆樹種や草本類が入れば、いずれは収まると思い去年提案をした。早急な対策が必要であるのであれば治山工法を採用する。

挿し木は強いドロノキを利用すると良い。

この地域の木を使用するという基本方針があり、この山にドロノキは無い。
最初からミズナラの林やハルニレの山を作ろうとして失敗した。自然の遷移に従い、強い先駆樹種から植林を行っていく。

表土を剥いだところは天然生稚樹が出てこないが、何も手をつけていないところはササの中からヤチダモが出ている。

防鹿ネットが無い時期に出てきたのか。その場合は、ササが有効である。

尾根にヤチダモを植えた事でお叱りを受けたが、尾根でもヤチダモは密生しており間違いではなかった。

天然更新でこれだけ出でてくれれば良い。

事業実行にあたってはササの表面だけを刈る。全部刈るのではなく、植えたところの周りだけ刈り効率性を考え、筋状に刈るなど工夫していく。

再生事業地視察：達古武地域

環境省釧路自然環境事務所の案内により、植栽場所に防鹿柵を設置した箇所と、稚樹が多くみられた箇所についての状況、間伐施工区等について視察した。

・実施計画作成当初に比べ、エゾシカ被害が顕著な状況となり、防鹿柵等の対策の必要性が出てきている。
・カラマツの下層に広葉樹の稚樹を定着させるために、間伐の効果検証を実施。

①現地7工区：②H25年度間伐区

- ・2014年1月にカラマツの間伐密度40%の間伐施工を実施。
- ・植栽木の光環境や伐採時に植栽した広葉樹に被害を及ぼさないため列状間伐を実施。
- ・作業路はバックホウで段切りを行い、切り土、盛り土が大量に発生しないように配慮して作業を実施。
- ・森林作業道は水の流れも出ておらず、良好な環境。
- ・将来的には苗木が順調に生育し体制が整った後は植栽を検討。
- ・奥に母樹帯がある為、地表処理のみで対応するかは検討課題。

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

間伐後、どんな苗を植えているのか。苗畑で作っているものか。
達古武で育てている広葉樹のダケカンバやミズナラ等を植える予定。
気象害で釧路の苗畑の苗木が全滅した場合などのリスク管理の為に、3割程度の苗木を札幌でも育てている。
雷別地区と同じように土壤凍結は起きているのか。
土壤凍結は起きていると考えられるが、地表処理は行っていないので土壤凍結により土砂が動いた等は確認出来ていない。



②現地1工区：③稚樹調査区

- ・防鹿柵外の被食状況について調査を実施。
- ・調査の結果、食害を受けている稚樹は80%程度みられたが、今年新たに被害を受けている食痕は、25%程度であった。
- ・今年についてはエゾシカが少なかったと想起させる。
- ・2010年度から2013年度までは、成長が停滞し、徐々に枯死していった。
- ・2014年度は残存している稚樹に関しては、ほぼ成長に転じている。
- ・2013年度から2014年度の間には、エゾシカの囲いわなを達古武地区に設定し、捕獲試験事業を行った為、エゾシカの影響が低下していると推定される。

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

雷別地区と同じく、エゾシカに何度も食害にあってはいるが、今年はよく伸びている。200cm程度になるまで食害にあわずに生育できれば、その後の更新が期待できる。

③現地2工区 植栽木追跡調査

- ・2010年度に列状間伐を実施し、その後植栽。
- ・達古武の自然林に元々あった樹種を選定し、多様な樹種を植栽。(ダケカンバ、ミズナラを主とし、他にアオダモ、ハルニレ)

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

ミズナラを植林している箇所の奥は何故、列状間伐せずにそのまま植えたのか。伐倒の際、植栽木などを傷めないか心配だ。

ミズナラを植栽している箇所は間伐区の林縁になり、その奥がまた別の植栽区である。指摘のあった箇所は、植栽密度、間伐が必要な基準値450本/ha以下であった。上木や枝が成長を阻害する可能性があるので、今後の検討課題だ。

カラマツ材の用途は何か。

用材に適していないカラマツが多い為、パルプ材になる事が多いと考える。

④現地 A-2 ⑤稚樹調査区

- ・10年前は、稚樹が大量にあった為、地表処理をしない地区とした。
- ・達古武地域における保全エリアの基準は、稚樹密度が0.18本(樹高50cm以上)/m²以上。
- ・2003年度当時の稚樹本数0.35本/m²と比べ、現在では調査区稚樹本数0.12本/m²まで低下。
- ・特に樹高250cm以下について2003~5年度の調査時には多数確認されたが現在では大幅に減少した。

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

現地では、エゾシカが好んで食べるアオダモの稚樹や幼木の減少が顕著で、食痕が多数確認された。
エゾシカによる被食が要因と考える。
東部保全地区についても今年の被食は少なかったが、エゾシカの密度が減らなければ、被食の圧力が増えるのではないかと懸念。

樹高の低い稚樹がなく、上木の密度が高いようだ。
ここは搔き起こしやササ刈りの試験区であり、上木を伐採することも考えられる。

搔き起こしでの更新はしていないが、天然更新の稚樹は大きくなっている。
冬先からエゾシカが集まっており、囲った所と囲っていない所とで10年間でこれだけの差が出るのは大きい。

小委員会

達古武地域自然再生事業について

このようなことが話し合われました。

委員長 委員 事務局

カラマツ間伐を実施していない場所での伐採・集材する方法について教えていただきたい。

植栽した苗木の上木にあるカラマツの扱いについては、自然に枯損させるか、地域住民の意見などを踏まえ木材として利用するか今後検討していく。

視察した7工区及び8工区は、伐採後の搬出作業を視野に入れ、次回のカラマツを伐採する際に植栽した苗木を傷めない列状間伐を実施予定である。その他については植栽木への被害が少ない方法を検討していく。

林業経営も視野に入れた検討が必要ではないか。釧路湿原のみを考慮すると今まで通りでも良いが人口が減少しては意味がなくなるのではないか。

環境省で実施している本事業が林業経営上可能なのかは疑問がある。将来的には人工林が自然林に向かう方法を示していくたいと考えている。

林業経営の議論の必要性は感じるが、道東全体・林業全体の問題として議論すべき課題である。